



Special Feature  
Slow Living City

Chapter

2

# スローシテイの潮流

均質化する世界に、小さな町はいかなる対抗ができるのか

Text by Shimamura Natsu 文・島村菜津



20世紀末のイタリア、世界各国と同様に、大都市では経済発展にともなう大規模開発と、グローバル化によってもたらされた町の均質化が進んでいた。こうした流れの中、小さな町が時間をかけて築いた魅力を守り、「スロー」な哲学を町づくりに活かすための組織「スローシテイ連合」が生まれた。

スローシテイ運動発祥の地、イタリア・トスカーナ州。徹底した景観法がスローな環境を支える。(A)写真提供／藤澤靖子(A)、島村菜津(B)

## ス

ローシテイ連合は、1999年、スローフード運動を生んだイタリアに、これを母体として生まれた。現在、イタリア国内に約73市町村、アメリカ、ノルウェー、韓国など世界の177市町村が加盟している。

母体となった「スローフード協会」は、北イタリアのプラに国際本部を持ち、国内約2万人、世界に8万人弱の会員を擁する食のNPO法人である。その当初からの会員で、当時、トスカーナ州グレーヴェ・イン・キアンティという小さな田舎町の町長だったパオロ・サトゥルニーニ氏は、1997年、ウンブリア州オルヴィエートで開かれたスローフード国際大会に参加した。古代の洞窟、バロック期の井戸、カフェや広場の町の各所に仕かけられた試食会や食と音楽の競演。憲兵隊の兵舎に世界からの700人の会員たちが肩を寄せ合い、地元

サトゥルニーニ氏は、暮らしやすい町の必須条件は、“交流の場”だと力説した。

デザイナー。その見事な演出に魅せられたサトゥルニーニ氏は、帰路、興奮冷めやらぬ頭で考えた。「このスローの哲学を、町づくりにダイナミックにつなげることはできないものか」大都市では、人口集中とともに生活環境が劣悪化し、大型店舗やファストフードの進出により、食生活だけでなく、町の様相そのものが均質化していく。しかし、自然に恵まれた小さな町まで、これに追従するのは馬鹿げてはいないか。「ならば、もはや大都市では望めない質の高い暮らし、ゆったりした時間と人間らしい大きさを保持する小さな町のネットワークが創れないものか」こうして翌日、カンパーニャ州のボジターノ、ウンブリア州のオルヴィエート、ピエモンテ州のプラの町長らに電話をし、99年、この4町から「スローシテイ連合」(Citta Slow)が正式に産声をあげた。人口5万人以下の「暮らしの質が高い」小さな町のネットワークだった。

# 「キアンティ砂漠」から、 世界がうらやむ 豊かな田舎へ

— グレーヴエ・イン・キアンティがスローを目指した背景

さかんに映画のロケ地になる、現在の美しいトスカーナ地方に足を運ぶと、それが太古から変わらぬ風景だったかのようには錯覚しそうだ。確かになだらかな丘を覆う葡萄や糸杉は古代から植林されたものだ。しかし、1970年代まで、この地方に農村観光というものは存在しなかった。農村が美しいという概念は、この地の暮らしが豊かになり、風景を磨く地元の努力とともに育ってきたのである。

サトゥルニニ氏の幼少期の60年代、フィレンツェ以外のトスカーナ地方は、忘れられた田舎だった。ことにキアンティ地方は、海もない、美術品もない、高速道路もない、ないもの尽くしのキアンティ砂漠と形容された。過疎化が止まらず、農家の次男坊だった彼の家でも2人の兄は都市へ働きに出て戻らなかった。

その意識変革に最初に寄与したのが、英国やドイツなどから来た外国人や、ミラノやローマなど都市からの移住者たちだったと、彼はいう。当時ヨーロッパでは、都市を逃れる人、アグリビジネスに投資する人が農村へ移民する流れが生まれた。これを転機とし、地元を離れた若者たちの意識も次第に変化していく。

同時に進んだのが、量産品のシンボルのようだったキアンティワインの量から質への転換だ。かつてグレーヴエには、港まで鉄道が走る巨大な醸造蔵もあったが、それも廃墟となつて久しかった。現在、それは地元の肉屋「ファロルニ」が買い取り、キアンティワインが常に100種も試飲できる画

ているか、というユニークな項目もある。

だが、サトゥルニニ氏は、暮らしやすい町の必須条件は、「交流の場」だと力説した。スローシティが問題にするのは、決して町の構造や建築だけではない。町の原動力は、むしろ目に見えないもので、それは「人と人の交流、会話、農家の知恵、職人の技、食文化、信仰……」といったものだと言っている。

## 地元商店街の シャッター化に、 いかに歯止めを かけるか

商店街のシャッター街化、個人店の疲弊は、日本だけの問題ではない。郊外型の大型量販店やアウトレットモールの進出は、世界的な傾向である。だが日本では、1992年、中小小売店の最後の砦だった大型店舗法を改正施行し、その流れを加速させてしまった。

一方、ドイツやオーストリアなどの先進地に倣い、イタリアで初めて、景観法の一環である都市計画法を活用し、大型量販店の進出を食い止めたのが、スローシティ連合の現会長である、マルコーニ町長のカステルノーヴォ・モンティ氏だ。イタリア半島を縦に走るアペニン山脈の裾野にある人口1万6000人ほどの山間部だが、約200の個人店が健在。そもそもティレニア海へ抜ける街道の要所で、中世から塩やスパイスの市が立ったため、周辺の村からも買い物にくる。そこでEU統合後、フランス系のカルフルなど大手3社が進出を打診。しかし、町はこれを阻止するべく、2005年に施行された「文化財・風景財法」を基に独自の「都市計画条例」を作成した。



ベンチや、ワインなどの  
地元産品充実は、  
スローなまちづくりの  
必須要素。  
(右左/⑧、中/④)

期的なエノテカ（ワイン主体の飲食店）に生まれ変わった。地方の再生に具体的に貢献したのは、国をリードするトスカーナ州の景観法の徹底ぶりだった。奇跡の経済ルネサンスと言われ、イタリアブランドが世界に進出した80年代、イタリアでも乱開発が進んだ。これに歯止めをかけたのが、当時、文化財・環境財省の政務次官だったジュゼッペ・ガラツソによる「ガラツソ法」で、これによって、たとえば海岸線から300メートル、河川から150メートル、森林や高山地帯といった一切に、開発が許されない保護地区が指定された。

こうした背景が整って、初めて農村観光というものが芽生える。

そして90年代前半、人口の回復期に町長になったサトゥルニニ氏が目指したのは、町を肥大化させないことだった。

「かつて発展といえば、道路や大型店舗を増やし、宅地化を進め、住民を増やすことばかり考えてきた。しかし、そんなことが住民を幸せにしたのだろうか？」

そこで大型ショッピングセンターより、市場や多種多様な個人店、地元スーパリーの地産地消度の向上。大型ホテルより、農家民宿やプチホテルやB&B。大型シネコンより、名画座や映画祭や地域の祭り……そうしたものを町づくりの軸に据えたのだという。

スローシティの指針には、「環境対策」「インフラ整備」「ホスピタリティ」「福祉」「地場産業の保護」の5つの項目に分かれた59の条件が連なる。美観を損ねる看板の除去、障害のない歩道の整備、歴史地区の修復と美観の整備、エコ建築の推進、市場や有機農法や食教育の推進、伝統食の見直し、スローな旅のガイドなどと具体的に、中には、ベンチは充実し

「市街地の中には、『1500㎡以上の大きな商業施設』しか建てられない。一方、町の郊外には『250㎡以下の施設』に限る、と定めたのです。市街地には、1500㎡もの広い土地などどう探してもありません。結局、大手スーパリーは進出を諦めざるを得なかったというわけです」

農村景観の保護のため、奇抜なパフォーマンスもした。町の一角に1960年代に建てられた巨大な養鶏場の廃墟があった。町は2005年、これを12万ユーロ（約1500万円）で競り落とし、解体。解体作業そのものを「町のエコモンスターをぶつつぶせ」という祭りに仕立てた。くじ引きで当選した親子が、ダイナマイトのスイッチを押し、爆破とともに拍手が沸き起こる。そんな過激なイベントを通じ、美しい農村風景とは何かについて市民に問題提起したのだ。

2005年、日本では全国に

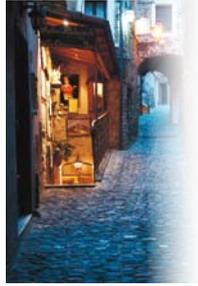
先駆けて、福島県でも日本型コンパクトシティ構想を掲げ、「商業まちづくり推進条例」によって郊外型の大型店舗の進出を防ぎ、市街地の空洞化を食い止めるようという動きが生まれた。こ

エスプレッソ、チーズ、  
広場での交流……。  
豊かな時間と暮らしは、  
身近な物の中から生まれる。  
(右中/⑧、左/⑧)

れは他県にも飛び火しているが、震災で多くの雇用が失われ、人口流出が顕著な現在が正念場だ。長年、福島で教鞭をとり、審議会会長を務める福島大学名誉教授の鈴木浩氏は、「地方の活性化といえば、企業誘致という古い概念から、なかなか日本の地方は自由になれない。しかし、復興後、視察に訪れる人々を郊外の大型店舗に案内するのか。今後は、それが10年後、50年後にも持続可能で、次世代の暮らしを本当に豊かにするのか、それを基準に据えなければならない」と訴えた。

# さらに小さくて スローな町による 「美しい村連合」

スローシティに触発され、イタリアでは、さらに小さな山村や漁村、離島の連合が生まれた。日本同様、イタリアも8割が山間地で、離島も多い。同じく過疎化や高齢化に加え、第一次産業の低迷を抱える。そこで2001年、35の村々が集まり、BBIと呼ばれる「イタリアで最も美しい村」連合「I Borghi più Belli d'Italia」が誕生した。初代からの会長は、ウンブリア州カステイリオオーネ・デル・ラーゴの元町長フィオリッポ・プリーミ氏だ。



イタリア、アブリカレの「坂の路地」と、グレーヴェの有機ワイナリー。(8)

これは、20年前から存在する「フランスで最も美しい村」連合に倣ったもので、06年からは、全村を紹介するカラーのガイド本も発行。今は200を超える村が加盟する。日本でも2005年、北海道の美瑛町、四国・徳島県の上勝町、長野県の大鹿村など49(2012年現在)の町村が加盟し、「日本で最も美しい村」連合が生まれた。

また昨年、日本初のスローシティとして、被災地でもある漁港・気仙沼が手をあげた。さらに、スローシティ連合に触発されて生まれた「スロータウン」連合には、滋賀県の高島市、岩手県の岩泉町など魅力的な町が名を連ね、01年から淡々と活動を続ける日本独自の「スローライフ・ジャパン」にも静

岡県の掛川町、山口県の柳井町などスローな町のネットワークが広がっている。

イタリアと日本は、雪国の山岳部から熱帯の島々まで縦に長い変化に富む地形や、多様な食文化など、共通点が多い。第二次大戦敗戦後の復興、工業化による地方の疲弊といった歴史も同じなら、少子高齢化や山村の過疎化という問題も同様に抱える。ただ、地方の市町村の活気については、一極集中の傾向が顕著な日本は、やや出遅れた感がある。

スローフードの哲学には、現代における生産者の保護と地方の活性化がその根底にある。その哲学をさらに具体的に実現するものがスローシティの思想だといえる。

地方の畑と都市の食卓をつなぐこと、地産地消の推進、ベンチ作戦による商店街の活性化、車両規制による歩いて楽しめる町づくり、テトラポッドの防波堤を自然石に、アスファルトを木の散歩道に替えるなどの新しい公共事業……日本でも次世代のためにできることは多々ある。

たとえば、賑わう漁港はさておき、人の少ない三陸の美しい沿岸部にまでことごとく巨大なコンクリートの防潮堤をそびえさせる予算を他に使えれば、どれほど住みやすく、美しい日本に近づけるだろう、と夢想する昨今である。

Shimamura Natsu

しまむら・なつ／ノンフィクション作家。大学卒業後、イタリアに滞在しつつ取材・執筆した著書『スローフードな人生——イタリアの食卓から始まる』(2000年、新潮社)は、日本でスローフードという考え方が広く知られるようになるきっかけをつくった。近著に『スローシティ——世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』(2013年、光文社新書)がある。